

課題研究要旨

中名寄小学校放課後活動における森林環境教育

柳原高文*

名寄市立大学保健福祉学部社会保育学科

1. はじめに

名寄市立中名寄小学校は、自然豊かな農村地帯に位置する全校児童 19 名の小規模校であり、特任校として市内のどこからでも児童を受け入れている。主な児童の通学手段は、名士バスに限られ、バスダイヤ改正により下校で利用するバス時刻が遅くなり、学校で待機しなくてはならない状況が生じた。そこで、放課後の時間を利用し学校近隣の寺社林、通称神社山で、児童が定期的に身近な地域の自然を観察する「風の子教室」を行うことになった。なお、この活動は、名寄市立大学コミュニティケア教育研究センターの課題研究の一つとして行われた。

2. 活動

「風の子教室」の目的は、「身の回りの自然への気づき」である。活動は次の4つに分類できる。

- 1) 季節の自然観察(図1)(春の自然観察・夏の自然観察・秋の自然観察)
- 2) 自然を知るアクティビティ(自然の色探し・落ち葉遊び)
- 3) 自然の不思議を知る活動(種子の不思議・種子の観察)
- 4) 樹木を知る活動(図2)(樹名板設置・樹木の説明・子ども樹木博士認定活動)



図1 観察風景



図2 樹名板設置風景

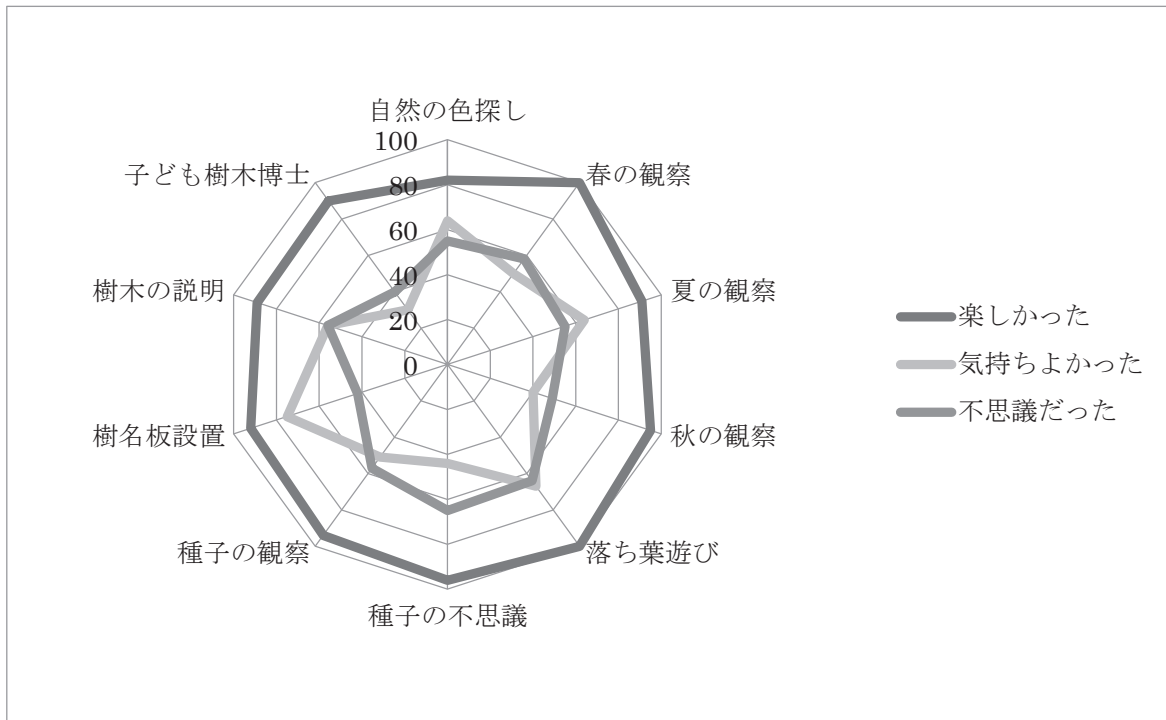
3. まとめ

10月に野外での活動は終了した。児童と活動を「楽しかった」・「気持ち良かった」・「不思議だった」の3要素の視点でふりかえりをした結果は表1である。

表1から多くの児童は、ほぼすべての活動を「楽しかった」と回答している。100%の児童が「楽しかった」と回答した活動は、「春の観察」と「落ち葉遊び」であった。これは、春に見られる植物の多様性の楽しさを知ったことや、落ち葉を使って遊ぶ楽しさを味わったことからと考えられる。70%前後の児童が「気持ちよかった」と回答している活動は、「樹名板設置」であった。これは、活動する神社山の樹木に樹名板がつけられることで、自分たちが主体となって観察に取り組んでいることの証と思えることと、整備されていく自然への気持ちよさの現れと考えられる。60%前後の児童が「不思議だった」と回答している活動は、「種子の不思議」や「種子の観察」、「樹木の説明」であった。これは、ツリフネソウの種子のはじける時の

*責任著者 E-mail:salix@nayoro.ac.jp

表1 活動のふりかえり



手の感触、キタコブシの種子をひっぱると糸状のものが現れる状態など、体験をともなう活動や、室内で説明した種子の不思議を知る話を聞いたり、種子の模型作りをしたりする活動の効果であると考えられる。

このように、児童は自然の中で活動することは、「楽しい」・「気持ち良い」・「不思議」と感じている。この活動をきっかけとして、児童は自然への関心が深まり、「生きる力」へと繋がっていくことを期待している。

なお、本研究の結果は2018年度学会誌への論文投稿、発表を予定している。